

伊勢原の遺跡

調査報告会



平成 25 年 3 月 16 日 (土)

午後 0 時 50 分 ~ 午後 4 時 30 分

伊勢原市立図書館 AV ホール



伊勢原市教育委員会・公益財団法人かながわ考古学財団

日 程

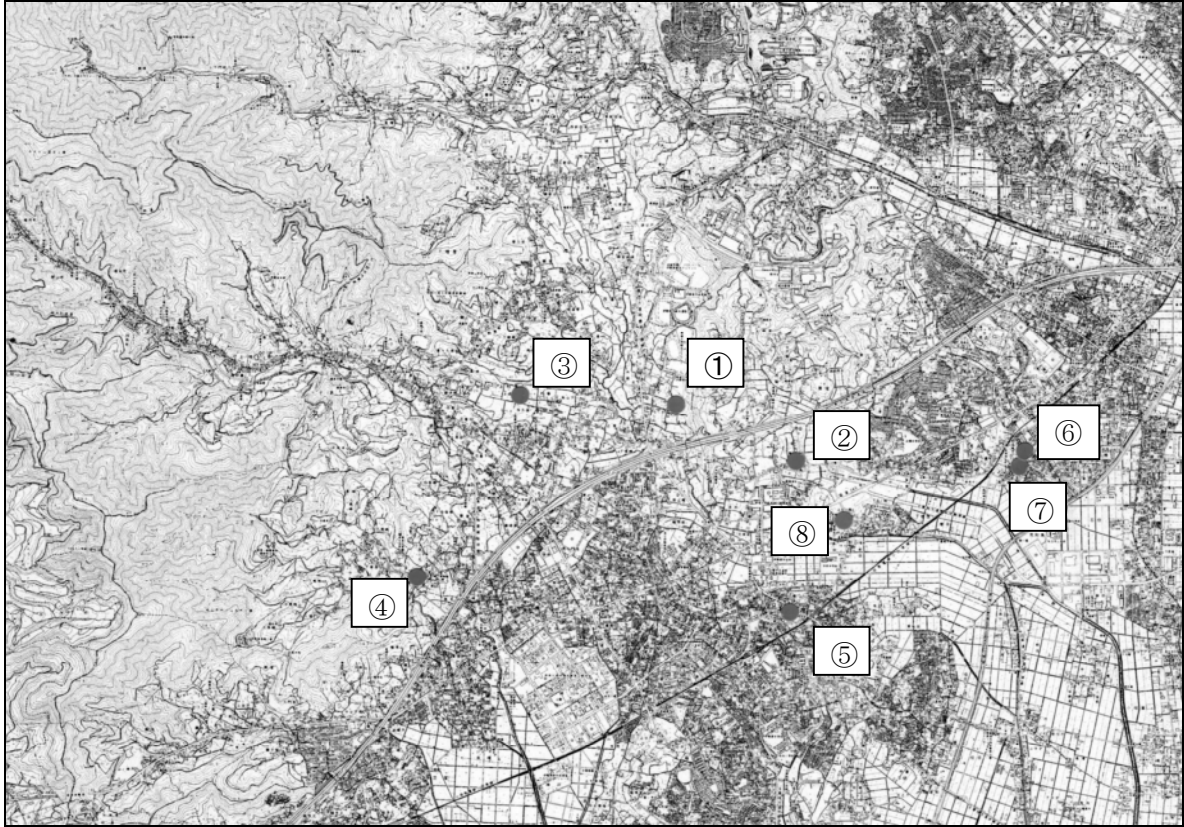
開 会 午後0時50分

あいさつ

報 告

- 1 西富岡・向畑遺跡
公益財団法人 かながわ考古学財団 新開基史 1時00分～1時25分
- 2 伊勢原市No.71・165 遺跡
公益財団法人 かながわ考古学財団 木村吉行 1時25分～1時50分
- 3 神成松遺跡第2地点
株式会社 パスコ 伊藤雅乃 1時50分～2時15分
- 4 三ノ宮・前畑遺跡第2地点
株式会社 玉川文化財研究所 迫 和幸 2時15分～2時40分
休 憩 (2時40分～2時50分)
- 5 池端・金山遺跡第2地点
株式会社 日本窯業史研究所 渡辺 務 2時50分～3時15分
- 6 高森・寺ノ下遺跡
株式会社 日本窯業史研究所 渡辺 務 3時15分～3時40分
- 7 高森・宮ノ越遺跡第3地点
株式会社 盤古堂 小池 聡 3時40分～4時05分
- 8 下糟屋・上町並遺跡第6地点
株式会社 玉川文化財研究所 小林晴生 4時05分～4時30分

閉 会 午後4時30分



第1図 報告する遺跡の位置図

- ① 西富岡・向畑遺跡 ② 伊勢原市No.71・165遺跡 ③ 神成松遺跡第2地点
④ 三ノ宮・前畑遺跡第2地点 ⑤ 池端・金山遺跡第2地点 ⑥ 高森・寺ノ下遺跡
⑦ 高森・宮ノ越遺跡第3地点 ⑧ 下糟屋・上町並遺跡第6地点

本書は、平成25年3月16日に伊勢原市立図書館で開催の「伊勢原の遺跡調査報告会」の配付資料です。この報告会は、近年、伊勢原市内で実施されている発掘調査の成果をいち早く地元で公開することを目的に、調査を行っている公益財団法人かながわ考古学財団と伊勢原市教育委員会が協力して企画し、共催するものです。なお、平成23年3月に報告できなかった遺跡の報告も実施します。

開催にあたり、株式会社 パスコ(神成松遺跡第2地点)、株式会社 玉川文化財研究所(三ノ宮・前畑遺跡第2地点、下糟屋・上町並遺跡第6地点)、株式会社 日本窯業史研究所(高森・寺ノ下遺跡、池端・金山遺跡第2地点)、株式会社 盤古堂(高森・宮ノ越遺跡第3地点)には、伊勢原市教育委員会からの依頼に対し全面的に御協力いただきました。また、個々の発掘調査については、事業関係者をはじめとして近隣の方々の御理解と御協力を得て実施されたものです。ここに深く、感謝いたします。

1 西富岡・向畑遺跡

—縄文時代集落と旧石器時代の発掘調査—

公益財団法人かながわ考古学財団 新開 基史

所在地 伊勢原市西富岡 120 他
調査期間 平成 19 年 4 月 1 日～調査中
調査面積 25,390 m² (調査終了地区含む)
発見遺構 地下室・畝・溝・道・土坑・ピット(近世以降)、竪穴状遺構・掘立柱建物址・地下式坑・炭焼き窯・井戸・溝・道・土坑・ピット(中世)、竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑・溝・道・杭列・ピット(古墳時代末～平安時代)、竪穴住居址・敷石住居址・水場遺構・配石・埋甕・集石・带状粘土列・土坑・杭列・ピット(縄文時代)、石器集中・礫群・炭化物集中(旧石器時代)
出土遺物 陶器・磁器・かわらけ・石製品・金属製品(中世・近世)、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・石製品・金属製品・木製品(古墳時代末～平安時代)、土器・石器・土製品・石製品・木製品(縄文時代)、石器・礫(旧石器時代)

1 遺跡の立地

西富岡・向畑(伊勢原市No.160)遺跡は、中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設に伴う事前の発掘調査として、平成 19 年度から調査を実施しています。遺跡は伊勢原市北部、西富岡地区の丘陵地帯に所在しています。地形上は西側を南流する渋田川と東を南北に連なる富岡丘陵に挟まれた台地上の標高 50m前後の南西向きかんしやめんの緩斜面と平坦地に立地しています。

2 調査の成果

平成 23 年度後半から 24 年度にかけては、1 区西・8 区まいぼつだにの埋没谷最下層の縄文時代水場遺構

の調査、14 区の縄文時代～旧石器時代の調査と 11 区の縄文時代の調査などを実施しました。

縄文時代では、これまでに竪穴住居址が 61 軒見つかっており、この内 32 軒が中期かつきかき(勝坂式～加曾利 E 式期)、29 軒が後期しょうみょうじき(称名寺式～堀之内式期)のものです。谷周辺の集落は谷を中心に円形に展開していますが、谷の西側では中期中葉の勝坂式から中期後葉の加曾利 E 式が主体で、谷の東側は加曾利 E 4 式から称名寺式・堀之内式うちしきの中期末から後期中葉が中心となっており、時期によって分布範囲が異なっています。

谷の内部では、建物址 2 軒・土坑 24 基・木組遺構 1 基・埋設土器 1 基・配石 1 基と杭列などが見つかっています。

土坑は幅 6mほどの谷底のやや標高の高い縁に沿って並んでおり、特に東側を選んで 16 基が掘られています。これらの土坑の中からはクルミ・トチの実の破片が数多く出土しています。中期の土器片も出土することから、縄文時代中期に木の実の貯蔵ちよぞうやアク抜きぬなどの処理に使われたと見られます。

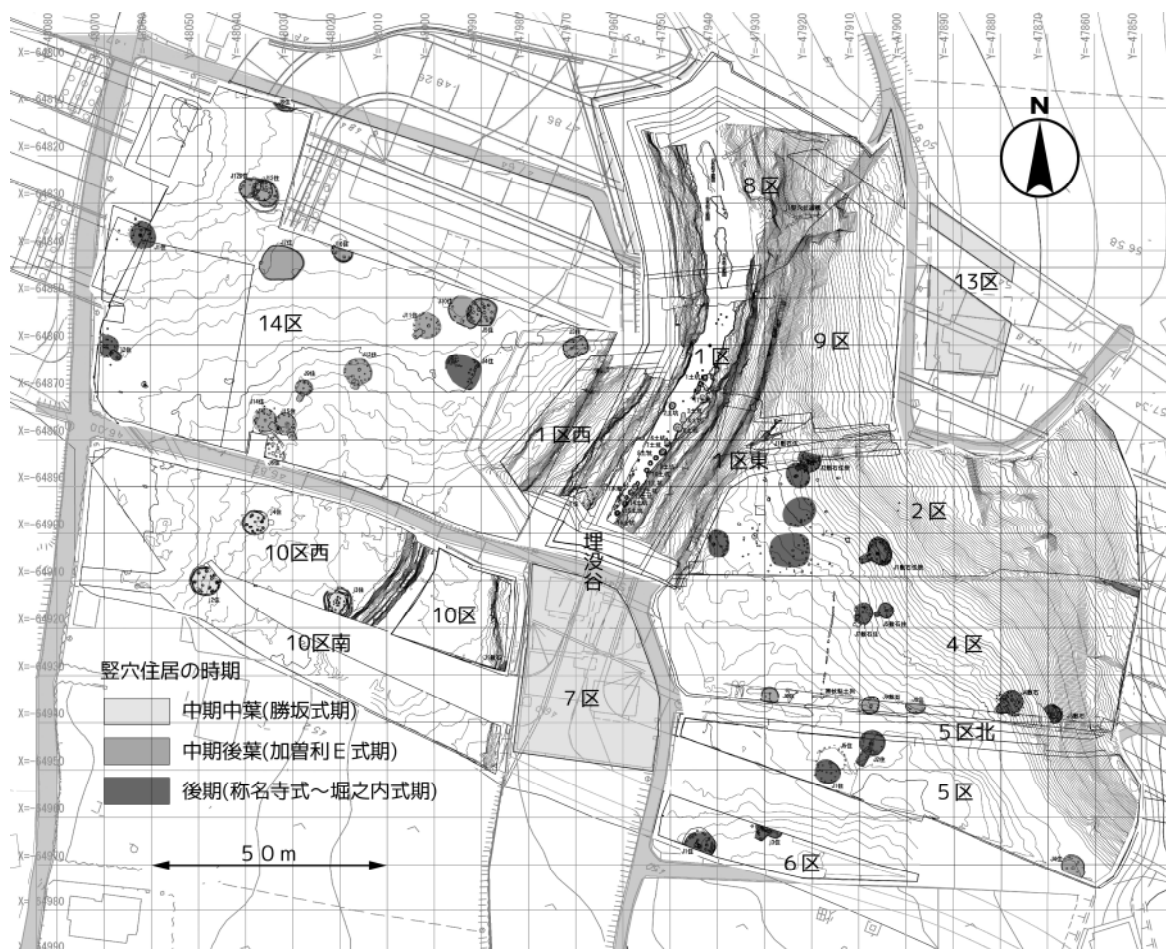
木組遺構は調査範囲の南端で見つかっており、丸太や割材を 2 列に並べて杭で固定しています。材質は約半数がクリで、カエデやカヤなども使われています。長さは約 11.6m、木組内側の幅は約 1m、外側うらごの裏込めされた掘方ほりかたまで含めると広い部分で 2.4mほどの幅があります。谷底の流水によって形成された窪みに設置されており、遺構内部が上流側の谷底よりも低くなっています。上流側の先端は半円形に杭を

並べ、外側に石を入れて上流側が内部に崩れないように補強しています。木組内部にはこぶし大以上の大きな礫を積んで仕切のようにしている部分があり、下流側では板を杭で止めた仕切も見ついています。この木組からは後期の土器片が出土しており、上流側先端付近で中期の土坑を壊して作られていることから、縄文時代後期に利用されていたと見られます。内部や周囲からは割れたクルミ・トチの実が出土することから土坑と同様の目的を持つ施設と考えられます。そのほか内部から珍しい赤漆塗りの小さな木製耳栓（耳飾り）が出土したり、掘方の裏込めから磨製石斧の柄とその未製品や匙状木製品の未製品が出土したりしています。

この木組遺構の西側には、川底より1段高い

位置に竪穴建物の柱穴が見つっています。内部に炉が見つっていないため、作業小屋のような施設だったと考えられます。

14区の旧石器時代の調査では、L1H相当（約2万年前頃）を中心とした関東ローム層の中から槍先形尖頭器・ナイフ形石器を含む約2,200点の石器が出土しました。この中には石器の素材となる剥片（フレイク）や剥片を取った原石である石核（コア）、石器を加工する際に飛び散った碎片（チップ）なども含まれていることから、ここで石器を作っていたと考えられます。周囲からは石焼き料理の跡と言われる礫群や火を焚いた跡と見られる微細な炭化物の集中なども見つっています。



第2図 埋没谷周辺の縄文時代遺構配置図

3 まとめ

縄文時代の調査では、中期から後期にかけての集落と、同時期に利用された水場の様子が明らかとなりました。水場で大量に見つかったクルミ・トチは、それぞれ外側の果実を腐らせて洗い、アク抜きをするために水場が利用されたと見られます。木組遺構の材の中にクリが多く使用されていることから、クリの実も多く採れたことが想定されますが、水を使った処理が必要ないためか谷底ではほとんど見つかっていません。谷底では蜂の巣石や石皿も見つかることから、処理をした木の実を割って中身を取り出す作業を行い、土坑で見つかった籠かごや土

器などで集落に持ち帰ったことが想像されません。

旧石器時代の調査では、これまでの調査で谷を中心とした東西両側でL1H～B2相当層から石器群が出土しています。ローム層の堆積状況の観察から、埋没谷の両側とも谷に向かって緩い傾斜があったと見られることから、縄文時代の谷のように深くは開析されていなかったものの、水のある窪地のような場所となっており、その周囲でキャンプをしながら石器を作り、狩りをしていたものと想像されます。

調査は今後も続きますので、さらに各時代の様相が明らかになるものと期待されます。



写真1 埋没谷の縄文時代後期木組遺構



写真2 木組遺構から出土した磨製石斧



写真3 14区L1H相当層の石器出土状況



写真4 出土した槍先形尖頭器

2 伊勢原市No.71・165 遺跡

—粟窪地区古代集落の発掘調査—

公益財団法人 かながわ考古学財団 木村 吉行

所在地 伊勢原市東富岡地先、粟窪地先

調査期間 平成 22 年 10 月 1 日～調査中

調査面積 8,375 m²(平成 22～24 年)

発見遺構 6 区 段切り・溝・土坑墓・土坑・ピット(近世)、溝・硬化面・土坑(中世)、竪穴住居址・掘立柱建物址・柱穴列・竪穴状遺構・土坑・ピット(奈良・平安時代)、土坑・ピット(縄文時代)

出土遺物 6 区 陶磁器・土器・石製品・金属製品・銭貨(中世・近世)、土師器・須恵器・石製品・金属製品(奈良・平安時代)、土器・石器(縄文時代)

1 遺跡の立地

伊勢原市No.71 遺跡の発掘調査は、中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設に伴い、平成 22 年 10 月から継続して実施しています。遺跡は、小田急小田原線伊勢原駅より北方約 2 km の距離にあり、渋田川と歌川に挟まれた標高 35～36 m ほどの台地及びその周辺に立地しています。

2 調査の成果

今回の発掘調査は、調査箇所が多地点(12 箇所)におよび、遺跡名が未決定のため、各調査区に 1～12 までの番号を付け、1 区、2 区・・・と呼称して実施しています。調査は平成 22・23 年度に 1～6 区を行い、平成 24 年度は 6～12 区を実施しています。ここでは、奈良・平安時代の集落跡が発見された 6 区を中心に古墳時

代～平安時代の竪穴住居址が発見された 3 区と 12 区の成果を紹介します。

6 区

台地の南東端に位置しています。奈良・平安時代の竪穴住居址 26 軒、掘立柱建物址 22 棟、竪穴状遺構 6 基などが発見され、集落が営まれていたことが明らかになりました。竪穴住居址は、一辺が 2.4 m～5.4 m を測りますが、3 m 代が主体を占めています。住居の壁際にはカマドが設けられていました。カマドは東または西に設けられているものがほとんどですが、北に造られているものも数軒認められました。床面に柱穴を持つものはほとんどありませんでしたが、四隅またはカマドの対面に 2 穴の柱穴を持つものが少数認められました。また、床下に円形の土坑が掘られている例が比較的多く確認されたほか、カマドの横や側面の壁に穴が掘られている住居が複数ありました。掘立柱建物址は、2 間×3 間が主体で、主軸方位は竪穴住居と同様にほぼ南北または東西を示しています。竪穴状遺構は、主に調査区の東側で発見されました。規模は竪穴住居址よりも一回りほど小さく、壁はゆるやかに立ち上がっています。底面が硬化している例もありました。

遺物は土師器・須恵器が多数出土しているほか、土錘・刀子・砥石なども出土しています。

3 区

6 区の 250 m ほど北側の台地の北東端に位置しています。ここでは、古墳時代～平安時代の竪穴住居址 6 軒・掘立柱建物址 2 棟のほか、溝

や硬化面などが見つかりました。竪穴住居址は、カマドが認められたのは1軒のみで、それ以外は床面に炉を有していたと思われます。6区の竪穴住居よりも古い時代に位置づけられます。掘立柱建物址の規模は、1間×2間でした。溝状遺構と硬化面は、調査区の南東で発見されました。溝は南西から北東に向かってほぼ直線的に延びています。上部の幅は約2m、深さは約1.4mを測ります。硬化面は溝の北側にあります。幅は1.4mほどで、溝と同時期に機能していたと思われます。台地から東側の低地へ下りる道の可能性が考えられます。

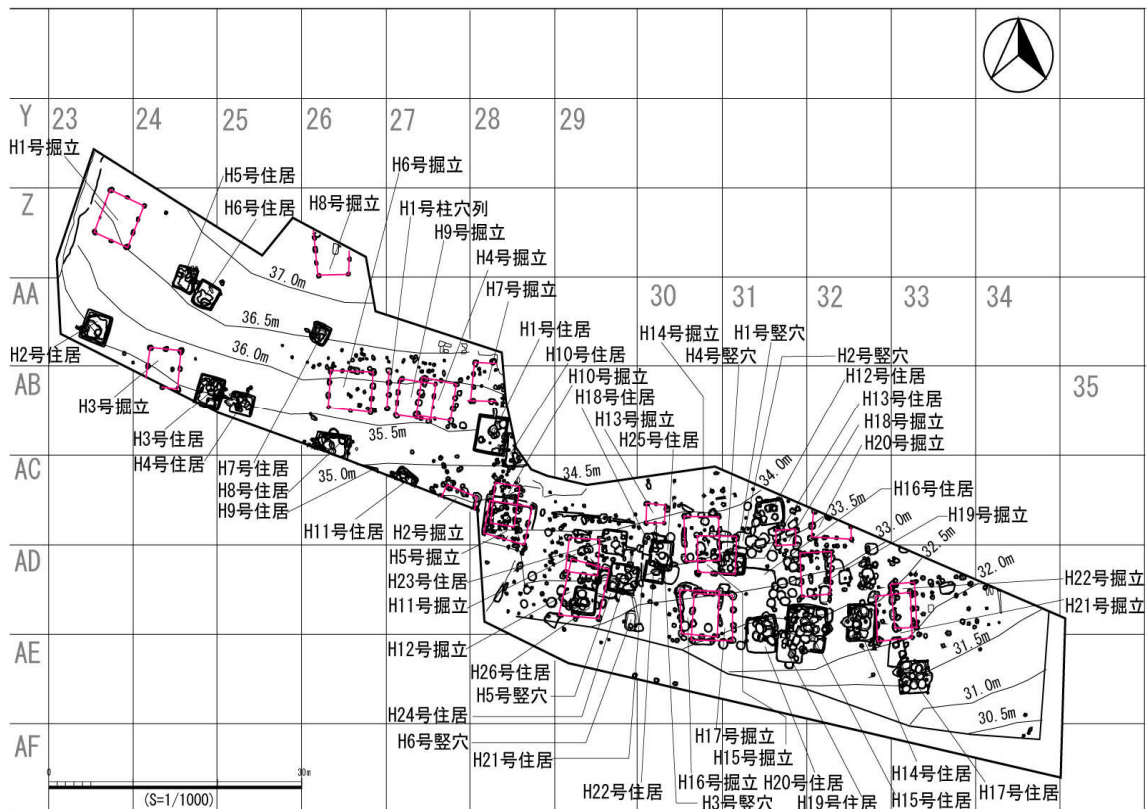
12区

3区の30mほど東側に位置しています。ここでは、古墳時代～平安時代の竪穴住居址3軒・掘立柱建物址1棟などが発見されました。竪穴住居址は、2軒が3区と同時期と考えられます

が、1軒は平安時代のものでした。

3 まとめ

竪穴住居址は、6区・3区・12区のほか、1軒だけですが6区の南側の崖下に位置する11区でも発見されています。一方、1区・2区・4区・5区では、居住に関連する遺構は発見されておらず、溝・畝・円形土坑などの耕作に関連する遺構が見つかったのみでした。これらのことから、古墳時代～奈良・平安時代には、人々は台地の南側及び東側に住み、その周辺で農耕を営んでいたことが明らかになってきました。3区と6区で発見された竪穴住居址には、ある程度の時期差が認められます。集落の存続時期等については、出土品等整理作業の段階で明らかにしていきたいと考えています。



第3図 6区奈良・平安時代遺構配置図

3 ^{かみなりまつ}神成松遺跡第2地点

—縄文時代から近世に係る発掘調査—

株式会社 パスコ 伊藤 雅乃

所在地 伊勢原市上粕屋地内

調査期間 平成23年10月24日～平成24年5月21日

調査面積 4,743 m²

発見遺構 柵列1条・土坑墓8基・土坑19基・溝2条・ピット2基(近世)、^{たてあなじょういこう}堅穴状遺構6基・^{ほったてぼしらたてものし}掘立柱建物址3棟・土坑43基・溝2条・焼土址1基・ピット30基(中世)、^{たてあなじゅうきよし}堅穴住居址5軒・掘立柱建物址3棟・土坑110基・溝6条・ピット92基(古墳時代後期～平安時代)、^{たてあなじゅうきよし}堅穴住居址7軒・土坑9基・ピット4基(弥生時代後期～古墳時代前期)、^{たてあなじゅうきよし}堅穴住居址1軒・集石9基・土坑墓1基・土坑22基・焼土址1基・ピット58基(縄文時代)

出土遺物 陶磁器、石製品、鉄製品、^{せんか}銭貨(近世)、^{はくさいとうじ}舶載陶磁、陶器、かわらけ、石製品、鉄製品、銭貨(中世)、土器、石製品、金属製品(古墳時代後期～平安時代)、土器、石器、金属製品(弥生時代後期～古墳時代前期)、土器、土製品、石器、石製品(縄文時代)

1 遺跡の立地

本遺跡は小田急小田原線伊勢原駅の北西約3kmに位置し、相模の霊峰として有名な大山の東南麓に広がる上粕屋扇状地の一部に立地しています。調査区周辺は、東に向かって傾斜する地形で、調査区西端で標高約76m、東端では約67mを測ります。調査区のほぼ中央に市道が走って大きく二分することから、市道の東辺を境に、便宜上調査区を東側と西側の二つに分けて発掘

作業を行いました。

2 調査成果

近世：近世の主な遺構は柵列と土坑墓です。柵列は調査区東西境界部分に位置し、地面を平坦に削平した面と46基のピットで構成されています。直線的に並ぶピットは、近世以降と考えられます。土坑墓からは副葬品として銭貨(銅銭・鉄銭)と陶磁器があり、これらの遺物から18世紀後半～19世紀前半と考えられます。

中世：15世紀の遺構はほとんど発見されませんでした。発見された遺構は12世紀後半～13世紀前半のものが中心でした。その中でも、C1号掘立柱建物址とC3号堅穴状遺構は主軸方向が同じで近接していることから、掘立柱建物址と堅穴状遺構が一体となって馬小屋として機能していたことが考えられます。

古代：古代の遺構では、堅穴住居址や掘立柱建物址が調査区東側の斜面地で発見されました。どの堅穴住居址も床下に多くの土坑が掘られています。掘立柱建物址も堅穴住居址と接するように立てられていました。古代の遺構は東側に集中し、西側で出土していない傾向があります。遺物の年代からこれらの遺構は8世紀後半から9世紀後半に想定することができます。

古墳～弥生時代：弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴住居址は、おもに西側調査区で6軒確認されており、分布に^{かたよ}偏りが見られません。Y3号堅穴住居址から出土した小銅環とY6号堅穴住居址から出土した^{てつのみ}鉄鑿は、希少性から

特筆すべき遺物として注目されます。特に鉄鑿は柄の木質も残っており、稀な出土例です。

縄文時代：縄文時代の遺構では、竪穴住居址・集石・土坑など調査区西側に多く分布している傾向がありました。特に土坑については、縄文時代早期～前期には調査区東側に分布し、縄文時代中期では調査区西側に分布する傾向が見られました。出土遺物では、縄文時代中期の土器が多く、出土土器の9割以上を調査区西側で占めています。遺物を出土した主な遺構として、竪穴住居址・集石・土坑墓が上げられますが、その中でも土坑墓が注目されます。J1号土坑墓からは、縄文時代中期のほぼ完形の土器4個が発見され、型式の異なる勝坂式あたまだいしきと阿玉台式の土器が納められていました。

その中でも1つの阿玉台式の深鉢の中には別の小型の縄文土器が入子状に入れられていました。J1号集石は今回発見された集石の中でも

規模が大きく、直径約1.4m、深さ0.95mの円形の土坑で、土坑の底面に礫が配置されており、中からは多量の炭化材が出土しました。使用された礫の総数は760個でした。

3 まとめ

今回の調査では近世・中世・古代・古墳時代・弥生時代・縄文時代の各時代にわたって利用された複合遺跡であることが確認されました。特に弥生時代の遺構は、渋田川最上流で初めての発見で、柄の木質部が残った状態で見つかった鉄鑿は貴重な発見だと言えます。調査に際しては、扇谷上杉氏の居館跡おうぎがやうさすぎの発見が期待されましたが、関連する時代の遺構・遺物を見出すことはできませんでした。本遺跡の西に位置する御伊勢森遺跡においても、堀跡・土塁等の遺構群は確認されていません。今後の上粕屋地内での調査の進展が期待されます。



写真5 調査区全景



写真6 掘立柱建物址と竪穴状遺構の完掘状況



写真7 竪穴住居址完掘状況



写真8 竪穴住居出土の鉄鑿

4 ^{さんのみや・まえはた}三ノ宮・前畑遺跡第2地点

—中世の道路遺構の調査—

株式会社 玉川文化財研究所 迫 和幸

所在地 伊勢原市三ノ宮前畑1495番地3ほか

調査期間 平成24年7月2日～7月21日

調査面積 約50㎡

発見遺構 土坑(縄文時代)、道路遺構・^{れきじき}礫敷遺構・柱穴(中世)

出土遺物 土器・石器(縄文時代)、かわらけ、陶器(常滑焼)、銭貨・馬歯(中世)

1 遺跡の立地

本遺跡は伊勢原市中央部の西側、小田急線伊勢原駅の西へ約3.0kmの三ノ宮地区に所在し、東へ約100mに三之宮比々多神社が位置しています。地形的には栗原川と鈴川に挟まれた河岸丘陵上にあり、標高は約66mを測ります。

2 調査の成果

今回の調査では、縄文時代の土坑2基、中世の道路遺構1条、礫敷遺構1基、柱穴6本が発見されました。

縄文時代の土坑は2基を確認しました。この2基の土坑は重複し、南東側の土坑が新しく、北東側の土坑が古いと判明しました。南東側の土坑の形状は^{びんけい}楕円形を呈し、大きさは長軸1.5m、短軸1.25m、深さ0.6mを測ります。北東側の土坑の形状は^{てい}円形を呈し、大きさは径1.4m、深さ0.2mを測ります。遺物は縄文時代中期～後期の土器破片が数点検出され、北西側の土坑からは石鏃が1点出土しました。

中世の道路遺構は礫敷遺構と重複し、道路遺構が新しいと判明しました。この道路は北西か

ら南東方向に延び、両端はさらに調査区外に延びるものと推定されます。また、南西側は現在使用されている道路により壊されています。今回の調査では、新旧2面の道路が重なった状態で検出されました。新しい段階の道路は、路面方向で約10.5m、路面幅は2.5～3.2mを測り、厚さ0.2mの固く締まった土層が堆積しています。この道路の北東側には路面方向と並行して側溝が確認され、幅は約1m、深さ0.2m前後を測ります。古い段階の道路は、路面方向で約10.5m、路面幅は2.2～3mを測ります。この道路の下には溝状の施設と掘り込みの浅いピットが多数検出されています。遺物は新しい段階の側溝から中世のかわらけと陶器(常滑焼)が出土しました。

礫敷遺構は東西4.2m、南北2.7mの範囲を確認することができました。この礫敷遺構の南西側は道路遺構が造られたことにより壊され、礫敷遺構の大半は北東側の調査区外におよぶものと推定されます。礫敷遺構の礫は底面に5～20cm大の礫が検出され、この礫の上にやや大型の礫が数点確認されています。遺物は礫の隙間と礫の下から中世のかわらけ、陶器(常滑焼)、銭貨、馬歯が出土しました。

柱穴は調査区の北東側で6本確認しました。この柱穴は道路遺構の路面の下から検出され、道路遺構より古いことが判明しました。形状は楕円形と隅丸方形を呈し、規模は0.5～0.7m、深さ0.3～0.4mを測り、柱穴の配置から建物址となる可能性もあります。

3 まとめ

三ノ宮・前畑遺跡は2回目の調査となります。前回は西側の隣接地で面積にして2,000㎡の調査が行われています。この調査では、縄文時代後期と弥生時代～古墳時代前期の集落跡、古墳時代後期の古墳が確認されています。2回目の調査は、面積50㎡と限られた範囲でしたが、縄文時代と中世の遺構が発見されました。今回発見された縄文時代の土坑は、前回の縄文時代後期の集落に伴うものと判断されます。中世の遺

構は、本遺跡周辺ではじめての発見となります。道路遺構は出土遺物から中世に属すると考えられます。そして道路を覆う土層には富士山の噴火によって堆積した宝永火山灰(1707年降灰)が観察され、この時期には埋没したことが判明しています。礫敷遺構はわずかな調査のため、規模や遺構の性格など不明な点を残す遺構ではありますが、北東側の調査区外に広く展開することが考えられます。



写真9 道路遺構全景(東から)



写真10 礫敷遺構全景(北東から)



写真11 道路遺構掘り方・礫敷遺構全景(東から)



写真12 道路遺構完掘全景(東から)

5 ^{いけばた} ^{かなやま} 池端・金山遺跡第2地点

—縄文時代の集落—

株式会社 日本窯業史研究所 渡辺 務

所在地 伊勢原市伊勢原一丁目 34-6 他

調査期間 平成 21 年 5 月 11 日～6 月 18 日

調査面積 295 ㎡

発見遺構 ^{どこう} 土坑・溝(中・近世)、土坑・道路状遺構(奈良・平安時代)、^{たてあなじゆうきよし} 竪穴住居址・ピット・土坑(縄文時代)

出土遺物 ^{はくじ} 白磁・陶器(中世)、^{はじき} 土師器・^{すそき} 須恵器(奈良・平安時代)、土器・石器・土製品・^{こくようせき} 黒曜石(縄文時代)

1 遺跡の立地

本遺跡は小田急小田原線伊勢原駅から北東へ約 450m の地点にあり、地形的には渋田川^{こはひ}の後背湿地と鈴川^{はんなんげん}の氾濫原に挟まれた伊勢原台地上に立地します。遺跡付近の標高は 31.5m 程を測ります。

2 調査の成果

発掘調査は店舗建築によるもので、建物基礎部分を調査の対象にした関係から、幅 1.2～2m のトレンチを設定して実施したようになりまし

た。

本遺跡の中心となる時代は縄文時代で、中期後半から後期中頃の竪穴住居址や土坑が数多く見つかっています。残念ながら調査範囲が狭小でしたので、全体の形がわかる竪穴住居址は 1 軒もありませんでした。また土坑の大半も同様でした。SI01 とした竪穴住居址は部分的にですが^{へんべい}扁平な石が敷かれる部分が認められました。おそらく^{しきいしじゆうきよし}敷石住居址であったものと判断しました。また、石はいずれも二次的に火を受けたようです。竪穴住居址の中央付近には火を^た焚いて暖房、調理、明り取りなどの性格を持った炉という施設があります。本遺跡の場合、縄文時代中期では地面を掘り窪めただけの^{じしやうろ}地床炉(SI06 炉 1・07・08・11・15)や、土器を埋設する^{うめがめろ}埋甕炉(SI05・06 炉 2)があり、後期では地床炉の周りを石で取り囲む^{いしがこいろ}石囲炉(SI01～03)が見られました。

3 まとめ

遺跡の名前のおおり、池端・金山遺跡は 2 回

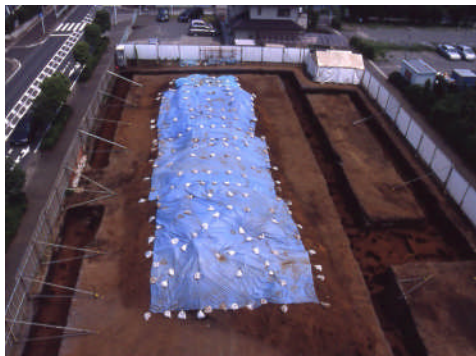


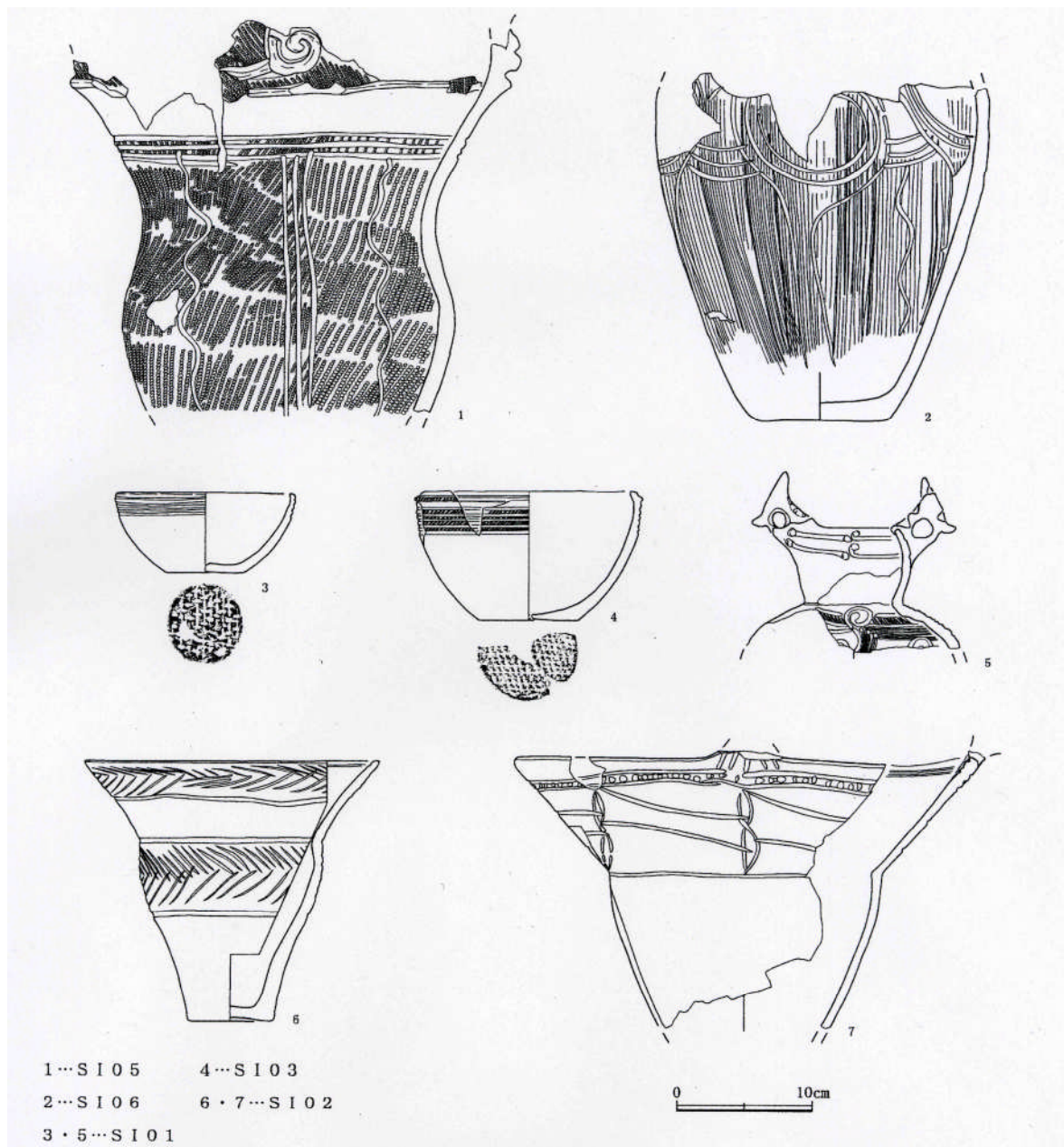
写真 13 調査区全景(北西から)



写真 14 SI01 敷石住居址(南東から)

目の調査になります。前回は道路を隔てて北西の地点を調査しており、また本遺跡の目の前は市道の拡幅に伴って調査が行われた池端・駒形(Ⅱ)遺跡になります。池端東交差点の北西側では沼目・坂戸遺跡の調査が2地点で行われ、最近も池端・坂戸遺跡が調査されています。他にも交差点の北東側では池端・椿山遺跡も調査されています。これらの調査ではいずれも縄文時

代中期から後期にかけての集落跡が確認されています。このことから縄文時代中期から後期にかけてこの周辺には規模の大きなムラが営まれていたことがだんだん明らかになってきました。今後は各遺跡単独の調査成果ばかりでなく、総合的な評価が求められるようになってくるものと思われます。



第4図 縄文時代の主な出土遺物

6 高森・寺ノ下遺跡

—古墳時代前期の方形周溝墓と中・近世の遺構の調査—

株式会社 日本窯業史研究所 渡辺 務

所在地 伊勢原市高森字寺ノ下 1229 番 3、
1230 番

調査期間 平成 24 年 1 月 6 日～1 月 27 日

調査面積 140 m²

発見遺構 方形周溝墓 2 基((古墳時代前期)、
堅穴状遺構 1 基・土坑 6 基・溝 2 条・小穴 26 口
(中・近世)

出土遺物 土師器(古墳時代前期)、白磁・かわ
らけ(中世)、陶磁器・鉄器(近世)

1 遺跡の立地

本遺跡は小田急小田原線愛甲石田駅の南西
約 800mの位置に所在し、北東側を小田急線が
北東—南西方向に走っています。調査前は畑と
して耕作されていました。

地形的には丹沢山地から南東方向に延びる
高森丘陵先端の標高 22m程に立地しています。
遺跡の南西側には 4 世紀末葉の円墳である
小金塚古墳や、高森・宮ノ越遺跡(第 1～3 地点)
が隣接しています。また遺跡の目の前には金林
山桑岳院と号する、浄土真宗本願寺派の
「長龍寺」が建立されています。

2 調査の成果

調査では古墳時代前期の方形周溝墓と中・近
世の切土に伴う堅穴状遺構や土坑・溝・小穴が
確認されました。

古墳時代前期の方形周溝墓は調査区の外に
延びていたため全容は明らかにできませんで
した。SZ01 とした方形周溝墓の西溝からは底部

穿孔の壺が 1 個体出土しました。また、この SZ01
の確認面からは、粒の大きさが 1cm を超えるよ
う大粒のスコリアが多く混じる黒褐色土が確認
できました。

調査区の中央には中世の切土が確認され、こ
の切土に伴って堅穴状遺構や溝が確認されまし
た。遺物の出土がほとんどなかったのですが僅
かな出土遺物から戦国期の 16 世紀頃の遺構と
考えられます。この切土は、後にやや方向を変
えて掘りなおされていました。この段階に伴う
溝や土坑は具体的な時期を示す遺物の出土はあ
りませんでした、時期は近世と考えられます。

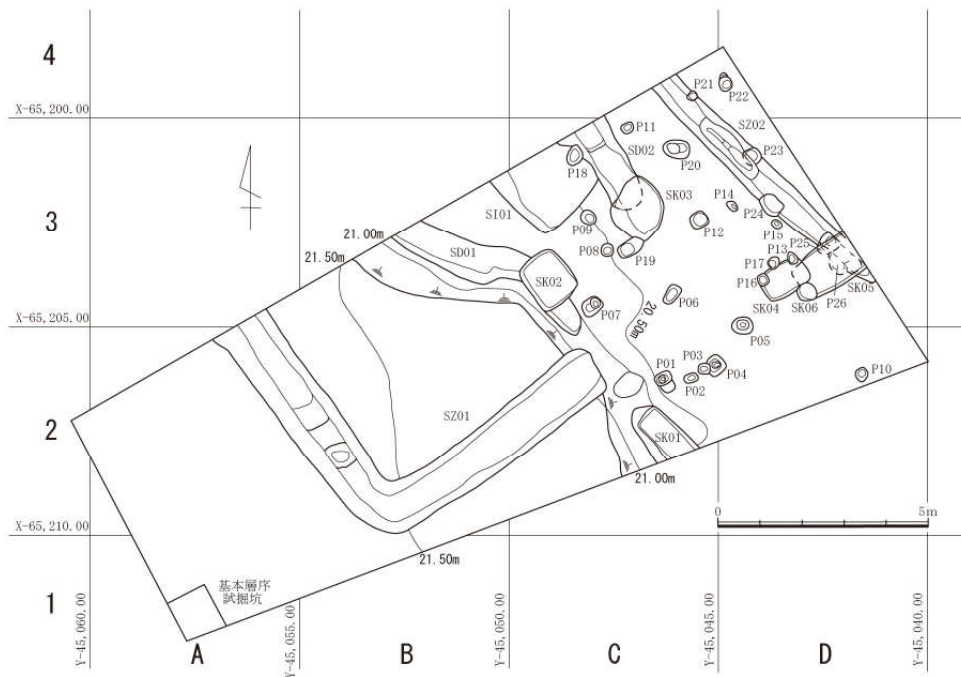
3 まとめ

SZ01 の確認面で確認した大粒のスコリアは、
以前から県央部の古墳時代前期の遺跡調査経験
が多い研究者の間では「五領スコリア」と呼ば
れ広く知られています。このスコリアが遺構の
下層か中層かあるいは上層に堆積しているか
で、ある程度時期を絞り込む手がかりになると
考えられてきました。最近の調査では、このス
コリアは弥生時代後期後半から古墳時代前期後
半にかけての時期に位置付けられる遺構から確
認されることが明らかになってきました。遺構
の存続期間や時期幅、遺物の出土層位と、スコ
リア層との厳密な層位関係の検証が重要である
といえるでしょう。

中世の切土についてはどのような人や集団
が関わっているかについて興味があります。高
森地区は中世には糟屋庄高森郷と呼ばれ、上杉

氏の支配下にあった領主が応永 19 年(1412)大山寺に同郷を寄進した記録があります。その後、後北条氏の時代になっても大山寺の寺領とされています。これらの資料から、切土に関わる人

物や集団として高森郷の領主や大山寺の可能性が推定されますが、その他にも可能性がある長龍寺も含め新資料の発見がない限り確定まではなかなか難しいといわざるを得ないでしょう。



第 5 図 遺跡配置図



写真 15 調査区全景(北西から)

7 高森・宮ノ越遺跡第3地点

—縄文時代から古墳時代前期の集落—

株式会社 盤古堂 小池 聡

所在地 伊勢原市高森字宮ノ越 1280 番地の
1 外、1279 番地

調査期間 平成 22 年 8 月 20 日～11 月 13 日

調査面積 約 2,789 m²

発見遺構 竪穴住居址67 軒、掘立柱建物址7 棟、
土坑 9 基、集石1 基、柱穴 80 基

出土遺物 土器・石器（縄文早～後期、弥生中
期～古墳前期）、金属器（弥生後期～古墳前期）、
中世石製品・銭貨、近世陶磁器

1 遺跡の立地

本遺跡は小田急線愛甲石田駅の南約 800mに
位置し、西側は小田急線の軌道が接しています。
西約 200mに国道 246 号線、南東約 500mには小
田原厚木道路が通っています。調査前は畑地と
して利用されていました。

地形的には高森丘陵の先端部で、標高は約 29
mを測り、緩やかに北東に傾斜します。南には
歌川が流れ、北側は小河川が開析し、このため
丘陵は南東に張り出しています。

本遺跡は伊勢原市No.54 遺跡（小金塚古墳）と
No.234 遺跡として知られ、過去には昭和 59 年に
小金塚古墳周溝確認調査、平成 11 年に第 1 地点、
平成 16 年に第 2 地点の調査が実施され、4 世紀
代の古墳と弥生時代中期～古墳時代前期の集落
跡、方形周溝墓群が確認されました。

2 調査の成果

縄文時代は竪穴住居址 1 軒と集石 1 基を検出
しました。住居址は柄鏡形住居址と呼ばれ、通

常の住居址とは異なる形に造られた縄文時代中
期末の住居址です。集石は穴に焼石が詰まった
もので、主に調理に使われました。そのほか早
期から後期の土器や石器が出土しました。

最も多く検出されたのは弥生時代中期から古
墳時代前期の竪穴住居址です。その中でも多い
のは古墳時代前期の住居址です。住居址の形は、
弥生時代中期は隅丸の長方形、後期は円形から
隅丸方形、古墳時代前期は隅丸方形から方形が
強くなります。炉址は中央部から奥壁寄りに築
かれて、入口の脇には貯蔵穴が造られています。

第 1・2 地点に続いて断面 V 字状の溝が検出さ
れました。この溝は環濠と呼ばれ、弥生時代後
期に集落防御のために築られました。

遺物は土器が最も多く出土しました。土器に
は壺、甕、高坏、器台、手焙土器、ミニチュア
があります。鉄製品や勾玉なども出土しました。

中・近世は溝状遺構や土坑、柱穴が検出され
ました。畑地として利用されていたようです。

3 まとめ

今回の調査は、第 1・2 地点から続く弥生時代
中期～古墳時代前期の集落跡を調査しました。
遺跡の北側部分には、竪穴住居址が密集する大
規模な集落跡が存在し、方形周溝墓群は築かれ
ていないことが確認されました。弥生時代中期
に数軒で構成されていた集落が後期から古墳時
代前期には大規模な集落に拡大する過程をとら
えることができ、周辺の歴史を解明する大きな
手掛かりを得ることができたと評価されます。



第 6 図 弥生時代中期から古墳時代前期・中世・近世遺構配置図



写真 16 調査終了状況航空写真

8 しもかすや かみまちなみ 下糟屋・上町並遺跡第6地点

—中世丸山城の調査—

株式会社 玉川文化財研究所 小林晴生

所在地 伊勢原市下糟屋 2298 番地先
調査期間 平成 22 年 2 月 1 日～2 月 28 日
調査面積 約 200 m²
発見遺構 堀、郭（一部）、ピット列、ピット（中世）、溝状遺構、畝状遺構、段切り状遺構（近世以降）
出土遺物 陶磁器、かわらけ、金属製品、銭貨

1 遺跡の立地

本遺跡は伊勢原市中央部の東側、小田急線伊勢原駅の北東約 1.5 km、上町並地区に位置する。地形的には歌川と渋田川に挟まれた低位丘陵上の標高約 26m に位置します。

2 調査の成果

今回の調査では面積約 200 m² と限られた範囲でしたが、中世の堀 1 条、郭の北東隅張出部（出隅）1 ヲ所、ピット列 1 列、ピット 1 基、近世以降では溝状遺構 4 条、畝状遺構 2 ヲ所、段切り状遺構などが発見されました。

近世以降の遺構には主に富士山の噴火によって堆積した宝永火山灰（1707 年降灰）が混在しており、中世遺構埋没後にこの地で展開した生業（畑作）の痕跡と考えられる畑の畝や区画する溝が発見されました。遺物は陶磁器の他、縄文土器や古墳時代の土師器なども少量出土しています。

中世では、平成 8 年度～平成 9 年度に行われた下糟屋 D 地区の調査で発見された 3 号堀と 4 号堀の延長部分が発見されました。東西方向の

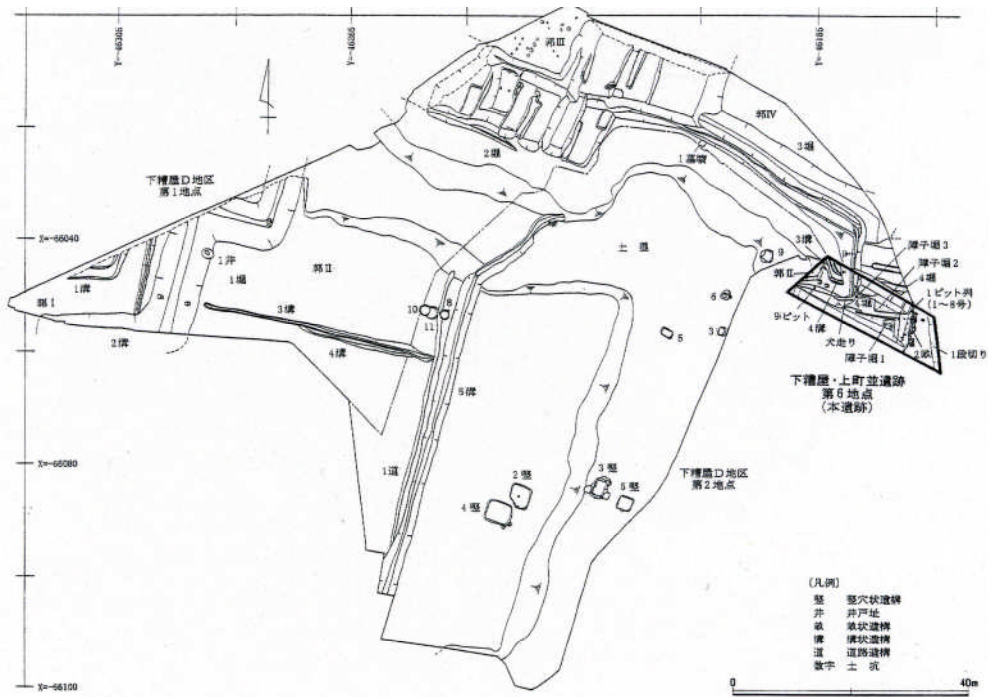
3 号堀が南方向に屈曲し、4 号堀と接合していることは解明されていましたが、4 号堀の堀幅と南側の未確認部分が今回の調査で検出され、4 号堀の規模と構造の一部が判明できました。現存する規模は、堀北側では堀幅約 13.2m、底面幅約 7.6m を測り、南側の堀幅が広がった部分では、堀幅 20.4m、底面幅 16.8m、深さ約 3.2m を測ります。堀底には 3 ヲ所の障子堀が認められ、土橋状に掘り残された平坦面には深さが最大でも 20 cm と浅い障子堀や階段状の施設も確認されていることから、未完成の可能性が考えられます。このほか、調査区北西部ではローム層を掘り残した東西約 10m、南北約 6.4m の方形張出部が検出されています。上面と底面との高低差は約 3m を測ります。この張出部は下糟屋 D 地区の郭 II の東端部に連続するもので、下糟屋 D 地区の北半と合わせると底面で東西約 9m、南北約 16～18m の方形張出部であることが確認できました。また、張出部上面の標高は下糟屋 D 地区より約 1～2m 低いことから、崩落および削平によるものと考えます。遺物は陶器・かわらけ、銭貨（北宋銭）などが少量出土しています。

3 まとめ

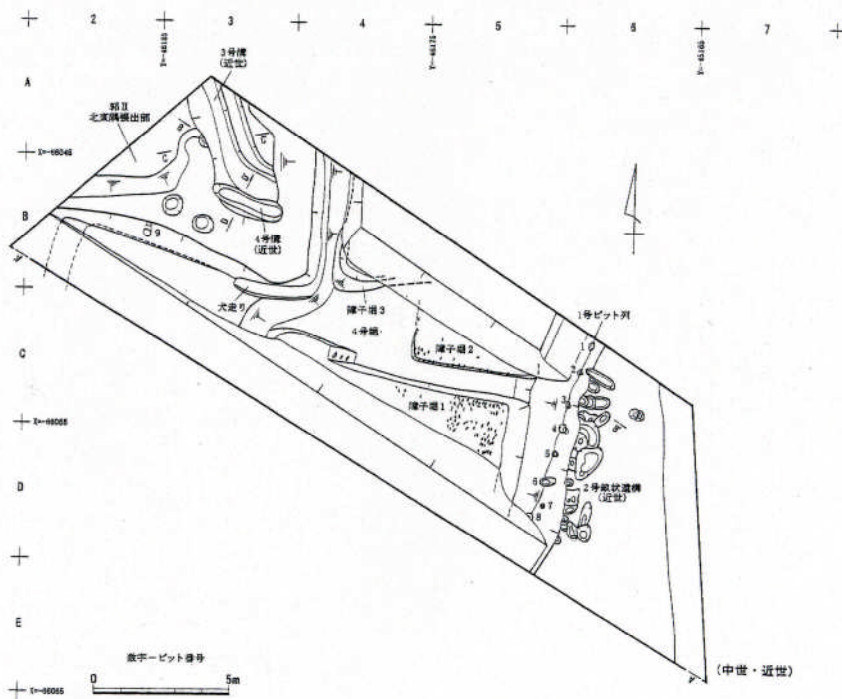
今回の調査では、下糟屋 D 地区東端で検出された郭 II の東西方向から南方へ折れる墨線が、南方から西方そして南方向へクランク状に折れて南の未調査地区へ延びていることが判明しました。これにより郭 II 北東隅張出部は、いわゆ

る「出隅」にあたることを確認されました。また、これまで掘であろうと推測されてきた調査

区南側の南北方向の窪地は、今回の調査によって埋没した堀であることが判明しました。



第7図 下糟屋・上町並遺跡第6地点位置図



第8図 下糟屋・上町並遺跡第6地点全体図

伊勢原の遺跡調査報告会

発行日 平成 25 年 3 月 16 日

編集・発行 伊勢原市教育委員会

